

2022年1月30日（日）

老球の細道653号

1月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

穏やかさもつかの間、コロナ第6波の怒涛の中でスタートした1月だが、私の敵は体調不良と金欠。毎日変化のない日常が続いたが、雪かきトレーニングによって右肘を痛め、バスケットのシュートに違和感。改めて「生は偶然、死は必然、幸福は自然に、不幸は突然やってくる。人生苦楽、四季折々、日はまた昇る」をトイレの壁に貼って息張る。

1・読書から

◆「人は誰でもなんらかの苦難によって自分自身を知るのである」〈今井晋著『人類の知的遺産26：ルター』講談社〉：歴史に残る偉人は何等かの迫害を受けながら、その苦難を乗り越えるのが条件である。人生の永遠のテーマは「真の自分」を知ること。ぬるま湯に入っているのは気が付かないで眠くなってしまうのがオチである。

◆「感覚的快苦による賞罰は、子供を理性に従わせるよりも、逆に理性を欲望に従わせて“ずるさ”を養うことに終わることが多い」〈野田又夫『人類の知的遺産36：ロック』講談社〉：アメとムチによる指導は選手にコーチの顔色を見ながら行動する癖をつける。ロックはまた良いしつけの規則として「自ら卑下せず、また他をさげすむこともない」をあげている。

2・新聞、パンフレット等から

◆「あんたがうれしいだけじゃなくて、みんながうれしいのが一番なんだで」〈朝日：折々のことば・渋沢栄一の母〉：今一番の喜びは、私のクリニックを受けた人たちの喜ぶ顔を見ることである。逆も真なり。教えている私が楽しめないようでは皆も楽しくないだろう。

◆「『上から投げろ』とか、『球は前で放せ』とか。アイクさん知っていますよ、ということばかり。でも僕は知っているだけで、できていなかった」〈朝日：ひと：元中日ドラゴンズ投手・山本昌〉：今年野球殿堂入り。修業に送り出されたアメリカで思い知らされたこと。私たちの周りにもいる。特に能力が高いと思われている選手達。

◆「配られたカードで勝負するしかないのさ・・・」〈朝日：天声人語〉：ある中学生が落ち込んだ時に思い出すスヌーピーの名言。人をうらやましがったり、ねたんだりしても前に進めない。チームも今いる選手、今ある環境で勝負するしかない。

◆「もう年ですが、やってみます」〈朝日：声：東京の無職78歳の若人〉：私たちの年代になると「もう年ですから・・・」という言い回しで後ろ向きの言葉が続く。あちこちにアンテナを張っていると私など問題にならない高齢な方が色々な分野でがんばっている。私もまだまだバスケットボールで上を目指したい野望を持っている。最近何歳だか忘れまして。

◆「原点にあるのは小学1年生のときに鉄棒で“け上がり”ができたときの喜び。あの感動は忘れられない。500技くらい覚えられた原動力になっている」〈朝日：内村航平引退会見〉：小学校時代の成功体験が大切なのはバスケットボールだけではない。改めて子どもたちの指導レベル「6つの“い”」。①楽しい②上手い③速い④強い⑤賢い⑥ムロい(自分の必殺技)。